接触場面における母語話者と学習者のスピーチレベルの使い分け

福冨　理恵

1. はじめに

日本語の会話では、丁寧体や普通体といったスピーチレベルが場面や相手によって使い分けられているが、同一会話内においてもスピーチレベルの混用が見られ、特に丁寧体が基調となっている会話では、一部の発話に普通体を使用することで堅苦しさを緩和する作用があると言われている（三牧2000）。

スピーチレベルに関する研究には初対面会話を扱ったものが多くあるが、これは初対面会話が人間関係のまったくない相手との会話であり、スピーチレベルの使い分けが相手との距離を調節する上で重要な要素となるからであろう。しかし、人間関係は初対面で終わるわけではなく、その後も続いていく。とすれば、相手と徐々に親しくなっていく過程でスピーチレベルをどのように使い分けていけば良いのか、ということが問題になってくる。

「知り合いだがまだそれほど親しくはない」という相手には、丁寧体ばかりでは堅苦しいが普通体を多用しても馴れ馴れしくなってしまい、スピーチレベルの使い分けは単純ではない。本研究では、このような状況における母語話者と学習者のスピーチレベルの使い分けを明らかにし、対話相手との距離の調整がどのように行われているのか考察する。

2. 先行研究

2.1 親疎関係の変化に伴うスピーチレベルの変化

鈴木（1999）は日本語母語場面、小柳（2000）は母語場面と接触場面を対象に、同一対話者による会話の縦断的な分析を行い、対話者同士が親しくなるにつれ丁寧体の使用が減り、普通体の使用が増加することを明らかにした。しかし、両研究では、丁寧体発話に代わり増えていく普通体発話がどのような状況で発話されているのかについては分析されていないため、実際に対話者がスピーチレベルをどのようにして使い分けているのかは不明である。

2.2 母語場面の初対面会話におけるスピーチレベル

宇佐美（1995）は社会人、三牧（2000）は大学生、陳（2003）は大学院生・研究生を対象に、初対面会話のスピーチレベルを分析した。その結果、丁寧体を基調とする初対面会話において、特定の状況での普通体発話への切り替え、すなわち普通体へのシフトには、丁寧さを損なわずに心的距離の短縮や会話の円滑化を図る機能があるということが明らかになった。対話者はこのようなスピーチレベルの使い分けにより、お互いの距離を調整しているものと考えられる。

3. 研究課題

本研究では、「『知り合いだがそれほど親しくはない』という相手との会話において、母語話者と学習者はどのようにスピーチレベルを使い分けているか」という研究課題を設定する。普通体発話の出現する状況を分析することによってこれを明らかにし、対話相手との距離の調整について考察を行う。

4. 研究方法

4.1 会話データ

都内女子大学の大学院生・研究生である上級日本語学習者3名に、知り合いの日本語母語話者と一緒に「面白かったこと」というテーマで20分間会話をしてもらい、それらを文字化したものをデータとした。すべて女性同士のペア[1]で、対話者同士の関係はフォローアップアンケートで調査した。

4.2 分析方法

発話を、文法的に完結し情報伝達が終了している「言い切っている発話」と、文法的には完結していないが情報伝達は終了している「言い切っていない発話（中途終了型発話）」に分類する。「言い切っている発話」は発話末のスピーチレベルによって「丁寧体発話」と「普通体発話」に分類し、それぞ

れの割合を求める[2]。

普通体発話は、出現状況によって分類をする。宇佐美（1995）、三牧（2000）、陳（2003）の初対面会話の研究では、丁寧体から普通体へシフトしやすい状況とシフトの機能が示されたが、本研究ではこれを普通体発話の出現状況に援用して分析を行う。対話相手との距離を調整するためにスピーチレベルをどのように使い分けているのかという観点から会話を分析するには、普通体へシフトした発話、すなわち普通体へ切り替わった最初の発話だけを取り出すのでは不十分であり、普通体発話全体を扱う必要がある。そのため、すべての普通体発話を出現状況によって分類し分析を行う。

先行研究で挙げられた状況において出現した普通体発話を「普通体発話Ⅰ」とし、「丁寧さを損なわずに、心的距離を縮めたり会話を円滑にしたりする普通体発話」と定義し、その他の状況で出現した普通体発話を「普通体発話Ⅱ」とし、「丁寧さのない普通体発話」と定義する。具体的には、表1の①～⑩の状況で出現した普通体発話を「普通体発話Ⅰ」に分類し、それ以外の質問、応答、叙述などの普通体発話を「普通体発話Ⅱ」に分類する[3]。

表1　普通体発話の出現状況による分類

「普通体発話Ⅰ」	「普通体発話Ⅱ」
①相手発話の繰り返し ②相手発話の先取り ③相手発話についての確認や確認の質問 ④確認の質問に対する答え ⑤相手発話への感嘆・現在の心情の表出 ⑥自己の発話についての補足・例示 ⑦冗談・結論部分などの強調 ⑧独話的発話・自問 ⑨語彙等の助けの要求 ⑩語彙等の助け	その他の質問、応答、叙述など

5. 結果と考察

5.1 「鈴木（29）— 張（29）」ペア

鈴木と張のスピーチレベルの割合は図1、普通体発話の内訳は図2のようになった。（括弧内の数字は発話実数を表す。）

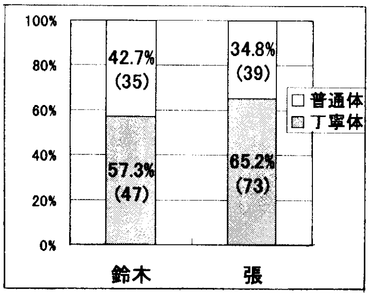

図1　スピーチレベルの割合

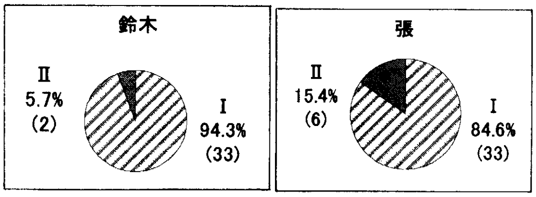

図2　普通体発話の内訳

鈴木も張も6割前後の発話が丁寧体発話であった。二人は大学院で同じ授業を受けているが、知り合って1ヶ月で授業中もあまり話したことはない。そのため、お互いにまだ親しさを感じるほどの関係ではなく、基本的なやりとりは丁寧体で行われたと考えられる。その一方で、普通体発話も3～4割見られた。これは29歳同士の同い年であるクラスメイトに対して丁寧体ばかり使用していては会話が堅苦しくなってしまうため、普通体を使って話しやすい雰囲気を作ろうとしたものと考えられる。

普通体発話の内訳を見てみると、鈴木、張ともに8～9割が「普通体発話Ⅰ」であった。このことから、二人はお互いに心的距離を縮め会話を盛り上げようとしながらも、それほど親しくない相手に対して失礼にならないように工夫しながら普通体発話を用いていると言える。

会話例1は、大学院受験についての話題で、鈴木が研究生等にはならずに自分で受験準備をしたと言ったのに対し、張が「普通体発話Ⅰ」の「⑤相手発話への感嘆」を繰り返している部分である。

【会話例1　大学院受験についての話題】

1 張　いきなり受験した:ではなく研修生とか。
2 鈴木　いえ準備は自分でしました。
3 張　あ すごい。hhhh　[⑤感嘆]
4 鈴木　hhh あ あの:仕事もしながらだったので
5 張　はい
6 鈴木　まあ自分でやった方が効率的にいいかなと

思って。
7 張　あ すご:い。　[⑤感嘆]

張は鈴木の発話に対して「普通体発話Ｉ」で感嘆を繰り返し表現し、会話に積極的に参加しながら雰囲気を盛り上げている。鈴木と張はお互いに丁寧体発話を基本としながら「普通体発話Ｉ」を多用することによって、丁寧さを損なうことなく話しやすい雰囲気を作り、心的距離を縮めていると言える。

5.2 「田口（29）― ハノ（27）」ペア

田口とハノのスピーチレベルの割合は図 3、普通体発話の内訳は図 4 のようになった。

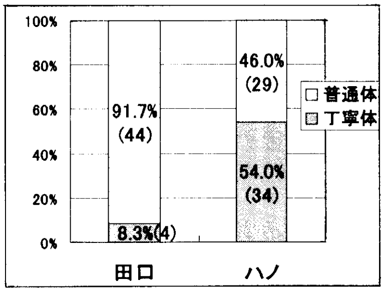

図３　スピーチレベルの割合

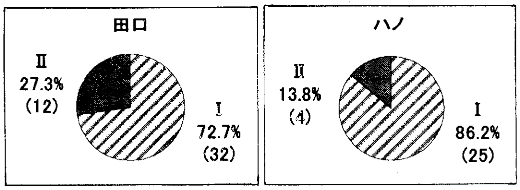

図４　普通体発話の内訳

田口とハノのスピーチレベルの割合には大きな違いが見られたが、これには二人の人間関係が現れている。二人は大学院で同じ研究室に所属しており、27 歳のハノは 2 歳年上の田口のことをお姉さん的な存在だと言っている。このことから二人の間には上下関係があると言え、それがスピーチレベルに反映された結果、田口は 9 割以上が普通体発話であるのに対し、ハノは丁寧体発話がやや優勢になったと考えられる。

普通体発話の内訳では、ハノは「普通体発話Ｉ」が 9 割近くを占めた。半数近くの発話に普通体を使用しながらも、会話の丁寧さは損なわずに田口に対する親しみを表わす工夫をしていると言える。一方、田口は 7 割以上が「普通体発話Ｉ」となっており、「普通体発話Ⅱ」による質問や叙述はそれほど多く行っていないことがわかる。そこで質問と叙述に注目して田口のデータを見た結果、「⑧独話的発話」や「中途終了型発話」が多く使用されており、8.3%の丁寧体発話もすべて質問の発話であった。

会話例 2 は、子育てと勉強についての話題で、田口は「⑧独話的発話」と「中途終了型発話」で自分の考えを述べている。

【会話例 2　子育てと勉強についての話題】

1 田口　なんか勉強したいと思ったの　子供生まれてからの方が勉強したくなったかな。[⑧独話]
2 ハノ　将来を考えて。
3 田口　ー中略ー(筆者注:子どもができてからは) もっとなんか自分を高めることをしたいなと思うようになったとか社会のことに興味があるようになったっていうか。[中途終了型]
4 ハノ　そうですか

田口はほとんどの発話に普通体を使用しながらも、質問や叙述は相手に直接向かわない独話的発話や最後まで言い切らない中途終了型発話で行うことにより、「普通体発話Ⅱ」の使用を控え丁寧さを維持しているハノのスピーチレベルに対して配慮をしていると考えられる。二人は普通体発話をうまく使い分けることによって、上下関係を保ちながらも心的距離を縮めていると言える。

5.3 「大坂（20）― アン（23）」ペア

大坂とアンのスピーチレベルの割合は図 5、普通体発話の内訳は図 6 のようになった。

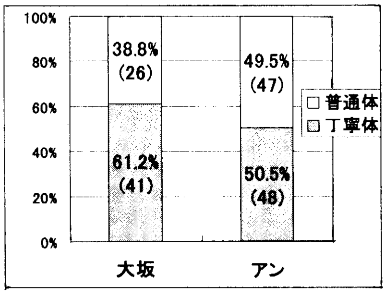

図５　スピーチレベルの割合

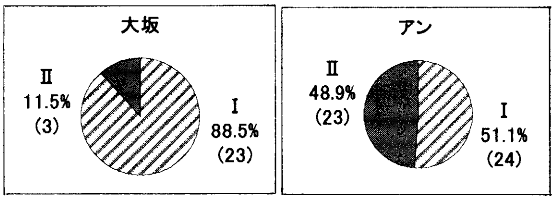

図６　普通体発話の内訳

大坂とアンのスピーチレベルは、丁寧体が 5〜6 割、普通体が 4〜5 割であった。二人はサークルの友人で知り合って1年ほどであるが、二人だけで話すことはあまりなくそれほど親しい関係ではない。そのため、普通体発話の使用は半分以下に抑えられ、適度な距離が保たれているものと考えられる。

普通体発話の内訳は二人に異なる傾向が見られ、大坂は「普通体発話Ⅰ」が9割近くを占めるのに対し、アンは「普通体発話Ⅰ」「普通体発話Ⅱ」がほぼ半々であった。大坂については、3 歳年上であるアンに対して「普通体発話Ⅰ」を多く用いることで丁寧さを維持しながら話しやすい雰囲気を作ろうとしていたと考えられる。アンも基本的には「普通体発話Ⅰ」を使用しているが、自分が話し手となり大坂に対して自己の体験等を説明する部分で「普通体発話Ⅱ」を多く使用する傾向が見られた。これには年齢差の影響も考えられるが、スピーチレベルの使い分けが完全には身についていないという可能性もあると思われる。

6. まとめと今後の課題

「知り合いだがそれほど親しくはない」という相手との会話において、母語話者と学習者は「普通体発話Ⅰ」を多用し、話しやすい雰囲気を作ったり親しみを表したりしながら会話をしていることが明らかになった。このことから、「普通体発話Ⅰ」は対話相手との距離を調整するストラテジーの一つであると考えられる。例えば、新しくできた友人に対して「ある程度丁寧さを保ちつつも親しみも表したい」という場合、どのような発話でも普通体にして良いというわけではなく、相手に直接向けられるような発話に普通体を使用すると失礼な印象を与えかねない。まずは、質問や叙述などの基本的な発話には丁寧体を使用しながら「普通体発話Ⅰ」を増やしていくことで、心的距離を徐々に縮めていくことができるだろう。普通体発話をうまく使い分けることにより、対話相手との距離を調整することが可能になると考えられる。

今回の研究ではスピーチレベルの使い分けについて対話者同士の比較をし、母語話者と学習者という視点での比較は行わなかったが、スピーチレベルの細かい使い分けを完全に身につけることは上級学習者にとっても難しいという示唆が得られた。今後、対象データを増やし、母語話者と学習者の比較を通して学習者にとってどのような点が困難であるかを明らかにしていく必要がある。

注

1. 「鈴木（29 歳）と張（29 歳・中国語母語話者）」「田口（29）とハノ（27・ベトナム語母語話者）」「大坂（20）とアン（23・ミャンマー語母語話者）」の 3 ペア。
2. 発話の分類は、陳（2003）を参考に行った。
3. ①〜⑧は宇佐美（1995）、三牧（2000）、陳（2003）で挙げられた状況を整理したもので、⑨⑩は接触場面を扱った佐藤（2000）で挙げられたものである。

参照文献

宇佐美まゆみ (1995)「談話レベルから見た敬語使用―スピーチレベルシフト生起の条件と機能―」『学苑』662，27-42.

小柳麻由子 (2000)「二者間会話における距離を縮めるストラテジー」東京外国語大学大学院地域文化研究科修士論文

佐藤勢紀子 (2000)『日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構』平成 10 年度〜11 年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書

鈴木雅恵 (1999)「日本語母語話者のスピーチレベルシフトについて―親疎関係を中心に―」『平成 11 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』57-62.

陳文敏 (2003)「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト―生起しやすい状況とその頻度をめぐって―」『日本語科学』14，7-28.

三牧陽子 (2000)「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出―「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして―」『大阪大学留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』4，37-53.

ふくとみ　りえ／お茶の水女子大学大学院　比較社会文化学専攻

mi_tierra_firme@yahoo.co.jp